

芥川文学における帝国主義批判の再検討

—その思想の展開と特徴をめぐって—

(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：D162676

氏名：胡逸蝶

本論文は、芥川龍之介の文学作品の分析を通して、彼の帝国主義に対する批判思想を明らかにするものである。

近年、芥川の歴史認識に関する研究が進展し、近代中国と朝鮮を舞台にした作品が、帝国主義、植民地主義支配が推し進められた時代の文脈の中で読み直されている。それに伴い、芥川と帝国主義に関する研究も進められ、彼のごく初期の作品における帝国主義批判も読み取られるようになった。だが、これらの研究は、芥川の創作時期を区分せず、一律に彼の帝国主義批判を読み取ろうとする傾向があり、彼の帝国主義批判のあるなしに重点が置かれ、その特徴についての検討は不十分なままである。

本論文は、時間軸に沿い、芥川の六つの作品から帝国主義に対する彼の批判思想を捉えることによって、その思想が深化していく過程を論じることとする。また、大正デモクラシーの影響で個人の自由を重視する芥川が、戦争下における人間の生の営みに眼を注いでいることに注目し、芥川が政治は「芸術より下等」だと明言しながら、帝国主義の戦争と侵略という政治性を帯びた問題を作品に取り入れ続けていることにも注目し、芥川の帝国主義批判を、芥川における個人主義、自由主義、また芸術と政治をめぐる葛藤と関連づけて論じる。こうしたことを通して、芥川の他の思想との関連の中で、帝国主義に対する彼の批判思想の特徴を再検討することを試みる。

植民地主義、戦争、文化という三つの視点から帝国主義に対する芥川を思想を検討するが、研究の対象として、植民地主義批判のモチーフが含まれている「南京の基督」と「僻見」、芥川の戦争認識が反映されている「首が落ちた話」、「将軍」、「桃太郎」、中国文化に対する芥川の考えが読み取れる「奇怪な再会」（「南京の基督」も同時にこの視点に属する）という六つの作品を選定する。

第2章では、「首が落ちた話」について論じた。まず、マスメディアによる日清戦争に関する戦争宣伝の特徴について考察した。そして、作品から捕虜優待というマスメディアによる戦争宣伝に合致するエピソードを見出し、「首が落ちた話」を書いた段階の芥川には、マスメディアによる戦争宣伝を安易に受け入れた面があると論じた。また、日本兵と中国兵との同一性を強調する語り方について分析した。清国兵と日本兵とを同様に、その運命が戦争に翻弄される哀れな存在として描いている芥川が、敵と味方との差異を無化しているだけではなく、帝国主義戦争における侵略する側と侵略される側との差異をも無化していると論じた。最後に、何小二という清国兵の生存願望に関する描写に分析を加えた。彼に代表されるのは、国籍、国の立場に関係なく、戦争に巻き込まれた人間の苦しみであり、芥川は彼の悲惨な人生を描くことによって、個人が平和に生きる権利を主張していると論じた。「首が落ち

た話」から芥川の平和主義思想を読み取った一方、後年の作品に比べ、この作品における芥川の帝国主義批判はまだ萌芽的な状態であり、帝国軍隊の横暴さへの批評性、そして、帝国主義戦争における、日本の侵略者の立場や戦争責任などへの自覚が欠如しているという限界を指摘した。

第3章では、「南京の基督」について論じた。まず、梅毒の歴史について考察し、芥川が生きた大正時代に、梅毒がコロンブスのアメリカ大陸発見によって欧州に伝わったもの、つまり被支配国から帝国に伝染したものだとして周知されたことを明らかにした。そして、作品における〈梅毒〉の象徴的意味について分析し、被支配国に逆に噛みつかれるという危険性を象徴していると論じた。また、この危険を回避する方法が梅毒に感染しなかった日本人旅行者によって提示されていると主張し、この旅行者について論じた。混血児と異なる方法で中国人女性の金花を扱った日本人旅行者によって、芥川は西洋の植民地政策とは異なる、もう一つの被支配国に対する方法、つまり中国の古典文化を尊重し、中国文化の独自性を保たせるという方法を提示していると論じた。芥川は中国文化を破壊するような植民地政策を批判しているが、より〈温和〉な被支配国に対する方法、被支配国に逆に噛みつかれるという危険を回避する方法を作品で提示していることから、彼の植民地主義批判の限界を指摘した。

第4章では、「奇怪な再会」について論じた。まず、日清戦争前後、すなわち1890年代と作品が執筆された1920年代という二つの時点においての、西洋の近代文明と中国の古典文化に対しての日本人の見方を考察し、1890年代における、西洋の近代文明へ追随する狂熱さは1920年代になってある程度醒め、中国文化への軽蔑も1920年代になってある程度反省され、その価値が再認識されたことを明らかにした。物語の時代背景が、作品が執筆された30年前の日清戦争の直後に設定された原因は、日本人が急速な近代化を反省し、日清戦争前後に軽視した中国の古典文化に改めて憧れを感じた1920年代において、芥川が、近代化による伝統文化の破壊という問題を見つめ、日清戦争前後という時期に遡ったのだと主張した。そして、中国人女性のお蓮を日本に連れ帰った日本人男性の行為を分析し、それが近代日本人の、中国文化を日本の土壌に移植する試みを象徴していると論じた。また、お蓮が日本で精神崩壊していくことについて分析し、彼女が発狂するという結末は、中国の古典文化を近代日本に移植する試みは必ず失敗することを象徴していると論じた。伝統文化に郷愁を覚えた近代日本人は、中国で冷凍保存されていると見なされた古典文化に慰めを求めたが、侵略戦争という手段の暴力性によって、中国の古典文化を破壊することしかできず、占有できなかったという芥川の考えを読み取った。

第5章では、「将軍」について論じた。まず、作品における中国人を嫌悪する日本の軍人、そして帝国日本に反抗的な姿勢を持っている中国人について分析した。芥川は中国旅行によって、日本と中国との対立の鋭さを再認識したため、作品の中で対立の立場にある日本人と中国人を作り出したと論じた。そして、田口という下級兵士の殺人をめぐる心境の変化を分析した。田口を、時流に流されやすく、国家意識に染まりやすい一般民衆の代表だと見なし、彼が戦場という異常空間において、人間性が抹殺され、帝国軍人になっていく過程を追うことによって、芥川の戦争批判を読み取った。また、N将軍という人物像に分析を加えた。空洞化され、符号化されたN将軍は帝国主義言説に利用された思想、文化の具象化であり、その人物像には、乃木将軍や〈武士道〉を思想宣伝の道具として利用した帝国主義的イデオロギーに対する芥川の批判と抵抗が潜んでいると論じた。

第6章では、「僻見」について論じた。まず、ニーチェの思想、特に〈超人〉思想とナチズムとの関係について述べ、彼の思想からナチズム的な要素を見出すことのできる可能性があることを明らかにした。そして、芥川文学とニーチェの〈超人〉思想との関係について述べ、〈超人〉に対する芥川の懐疑と畏怖の心情を、帝国日本の植民地拡張と関連づけて解釈した。「善悪の彼岸」に立っているニーチェの超人は、日本という国家でいったん主導権を握れば、帝国主義の道を猛進するだろうという憂慮が、芥川の〈超人〉に対する懐疑と畏怖の心情に含まれている可能性があるとして論じた。また、芥川における〈超人〉像の独自性について分析し、岩見重太郎のような超人が代表しているのは、民衆に神格化され、理想化された国の権力者だと論じた。最後に、〈超人〉に追随しようとする〈我々〉という群像について分析し、この群像によって、芥川は戦争に協力的な民衆像を提示していると論じた。このように、作品から、平等、平和など既成の道徳を脚下に蹂躪する〈超人〉と、〈超人〉に追随し、協力する民衆がいたからこそ、日本は植民地主義の道へと進んでいったという芥川の認識を読み取った。

第7章では、「桃太郎」について論じた。まず、明治と大正期に流通していた桃太郎像の考察を行い、当時の世間に流布していた桃太郎像は侵略主義、軍国主義と親和性を持っていることを明らかにした。そして、芥川が視点を転換し、鬼の立場、つまり戦争相手国の人の立場に立って桃太郎の鬼が島侵略を語ったのは、関東大震災朝鮮人虐殺事件の影響を受けたからだとして主張した。大震災朝鮮人虐殺事件において市民が演じた役割と桃太郎の鬼が島征伐において犬、猿、雉の三匹が演じた役割との類似性について分析し、犬、猿、雉は私利私欲のために自発的に戦争に関与した市民を象徴していると論じた。また、老夫婦と桃太郎、桃太郎と犬、猿、雉の三匹、三匹の間の矛盾が全て

外部の鬼が島に転嫁されたという設定の意味を検討し、この設定から、日本国内の矛盾の対外転嫁として、戦争が勃発するという芥川の考えを読み取った。最後に、桃太郎の天才論的な意味合いを検討した。〈桃太郎〉的天才に対する芥川の矛盾した態度から、桃太郎のような国の権力者、時勢、市民の三者は作用し合い、戦争責任は権力者だけではなく、市民にもあるという芥川の考えを読み取った。

このように、芥川の初期作品から後期作品における帝国主義批判という思想は、次第に深化していくことを明らかにした。そして、彼の文学における帝国主義批判という思想の特徴を三つにまとめた。第一に、芥川は個人の生に関心を向け続け、個人の命と自由が戦争によって奪われたことに批判的な目を向けている。第二に、芥川は中国文化に関心を向け、帝国主義戦争、そして日本の植民地政策が中国の伝統文化、古典文化を破壊することに対して批判を行っている。第三に、芥川の帝国主義批判の重点は被支配国の文化が破壊されることから日本の権力者と市民の帝国主義戦争への関与に移っている。

最後に、大正文壇という特殊な社会の中での、芥川文学における帝国主義批判を検討した。芥川は同時代的限界を全て超越していたわけではないが、限界のある国主義批判は、大正時代において見れば、かなり深いものなのであり、それを十分に評価すべきだという結論に至った。

